

舞鶴

まづる

THE STORY OF
REPATRIATION
&
MAIZURU

ひきあげ

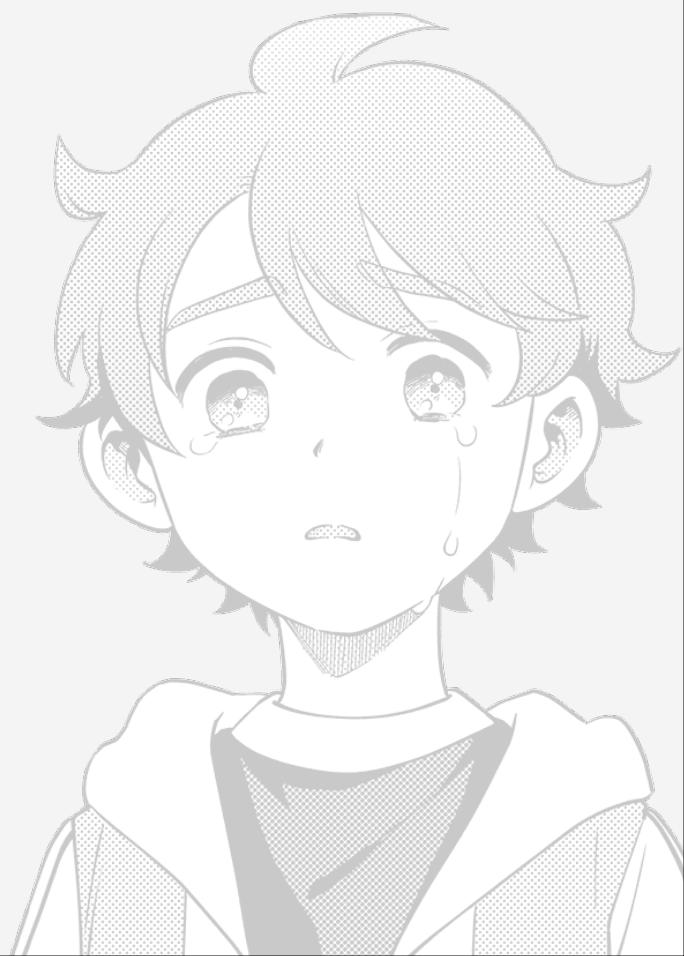
引き揚げ

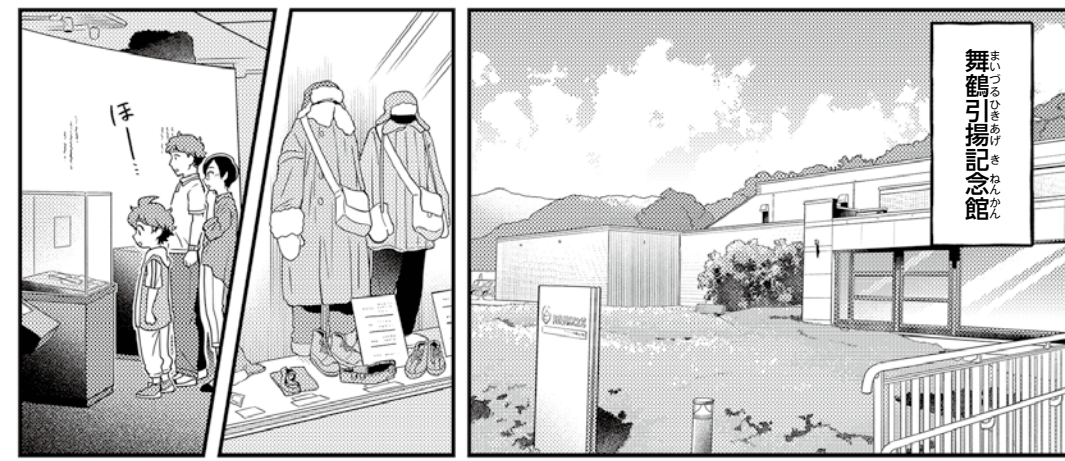
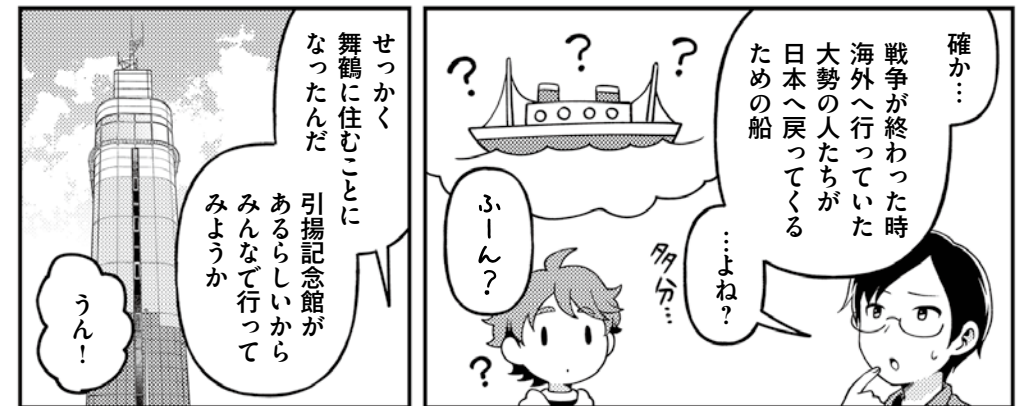
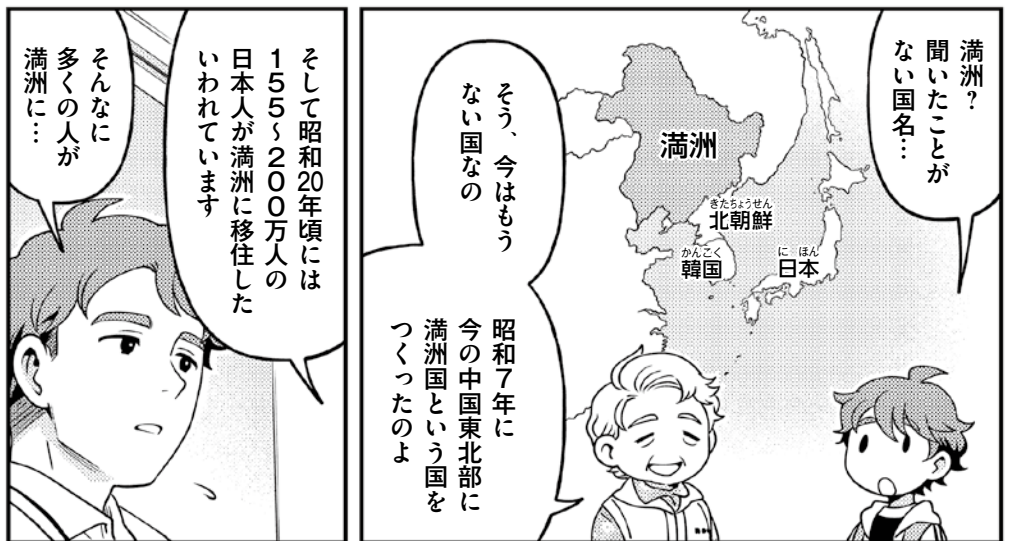
と

マンガ作画：濱田咲乃
発行：舞鶴引揚記念館

そう遠くない
昔に

そんな思いをした
人たちがいたなんて…





満洲で終戦を迎え
生きのびた
多くの日本人には
帰国までに
たくさん悲しい
出来事がありました

満洲から日本へ
帰る船に乗る
ために

遠く離れた港まで
行く必要が
あったのです

その中には
まだ幼い子ども
たちもいました

親子で日本に帰るためには
港まで100キロ以上もある
道のりを荷物を持って
小さい子どもの手を引いて
歩かなくてはならなかったんです

…こんな話も
あります…

隠れろっ！
ソ連兵だ！！

母ちゃん
タエが！

おい
泣きやま
せろ！

見つかったら
全員殺される…！

頼むから
泣きやんで…！

…よし
やつらが
離れた

進もう

か…
母ちゃん！

え？

タエ！！

そ…そんな！
私…
なんつこと…！

気にやむな

我々が
生き残るために
必要な犠牲だった
のだよ

しかしその
数週間後

母ちゃん！

ガラッ
うっ

ごめんな…
母ちゃんもう少し
休憩してから
行くわ…

母ちゃん
やつぱり
一昨日から
なんも食うて
ないんやろ

私たちに
ゆずって…！

…そんなこと

ない、よ…

…なあ、この線路に
沿って進んだら
きつとみんなに
追いつくから…

あんたたち
だけでも
先に…

いやや！
母ちゃんを置いて
行かれへん！



母ちゃんが
行かんのやったら
私らも行かん！

ごめんなあ
タエ...



これやったらあの時
一緒に死んであげたら
良かったねえ...



3人はその場を
はなれることが
できなかった
そうです

...



そんなことが
たくさんあったから
引揚者の中には子どもの命
だけでも助けようという思いで
地元住民にあずける
人もいたの



この時の子どもたちが
のちに中国残留孤児と
呼ばれるようになったんです
大人になってからようやく
日本に帰国できた人もいたの

満洲に置いていかれて
お父さんやお母さんと
はなればなれに
なっちゃったの？
ぼくだったら
そっちの方が
怖いかも...



そう、そういう
究極の選択を
しなければ
ならなかったの

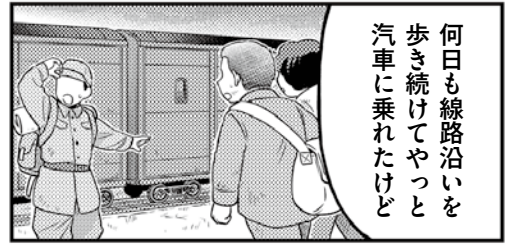
子どもはもちろん
両親にとっても
つらい決断だった
と思うわ

満洲から引き揚げて日本へ無事に
帰ることができた人たちは
ここ舞鶴や博多、佐世保などに
上陸できたのですが

帰る船の上で命を落とす
人もたくさんいたのです



何日も線路沿いを
歩き続けてやっと
汽車に乗れたけど

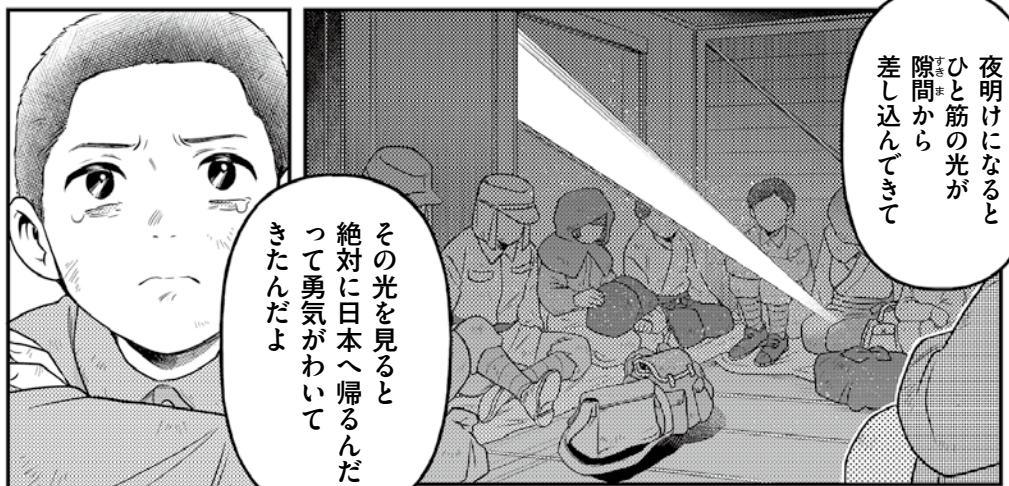


貨物列車
だったから
中は真っ暗
一体どこを何日
走っていたのか
見当もつかない



夜明けになると
ひと筋の光が
隙間から
差し込んできて

その光を見ると
絶対に日本へ帰るんだ
って勇気がわいて
きたんだよ



家を出た日から
いったい何か月
経ったんだろ



ああでも...





船の中から
紙くずを
かき集めたの
お見送りの花の
代わりにあなたからも
送ってあげて

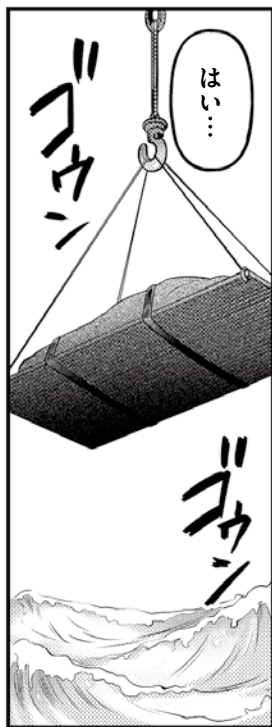


そうして
彼女たちの
亡骸は
お見送りの
花とともに
深く青い海へと
沈んでいった



あの光景を
あの時の気持ちを
日本に帰ってもぼくは
忘れないだろう…

そして
その数日後
彼はじつに
1年3か月の
長い道のりを終える
ことができたのです



はい…

ゴッソ

ゴッソ



またか…



やっと
たどり着いた
港から
船に乗って
これであいに
日本に帰れると
思ったけど…

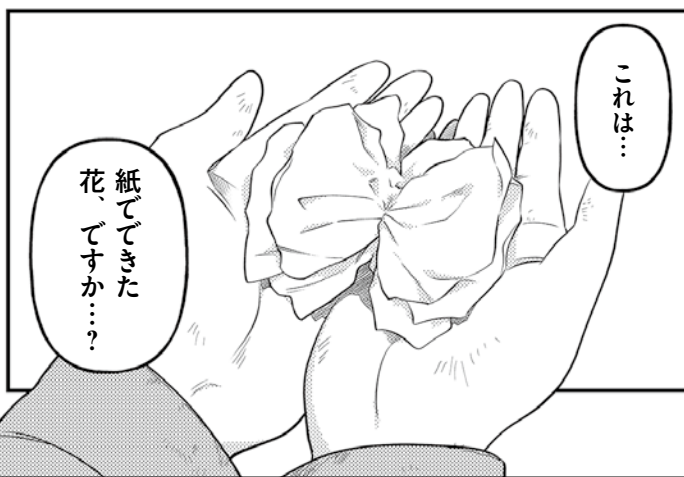


小さな
子どもも
おる…

この子も
日本の地を
ふみたかった
だろうに…



その日も
何人かが
亡くなった
衛生上の理由で
船の中に遺体を置いて
おくことはできずに
※水葬 水葬にするしかなかった



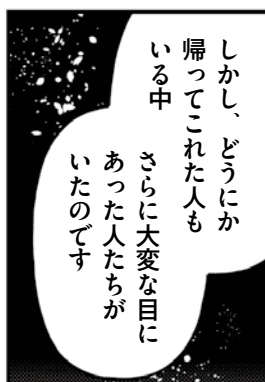
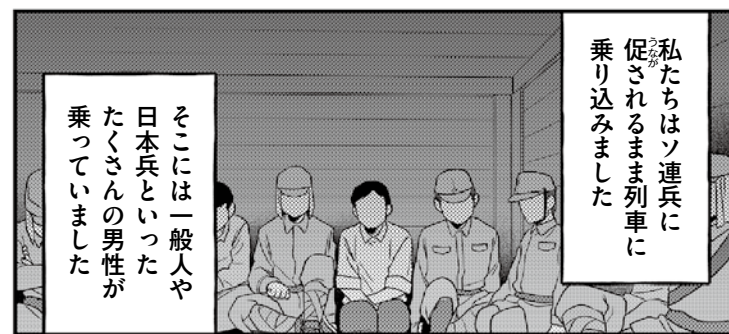
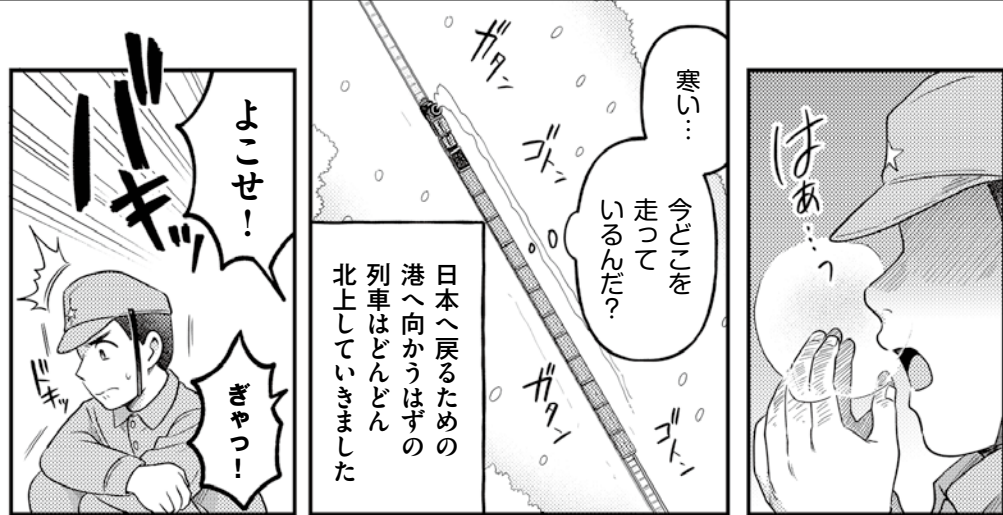
紙でできた
花、ですか…？

これは…



ねえ…
良ければ
これを…
え…

※水葬……海や川などに遺体を葬ること





そこから先は
地獄の日々でした

ドイツとの戦争により
大きな人的・物的被害を
受けたソ連が戦後復興の
労働力を補うため

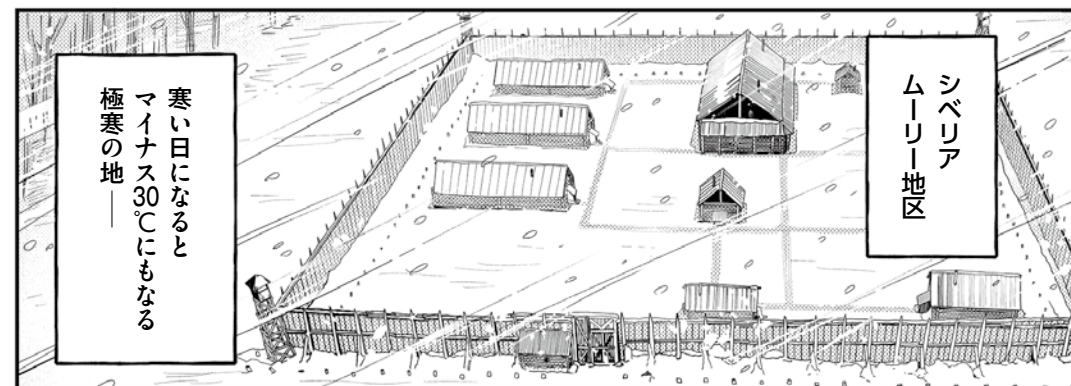
日本人だけでなく
同じ敗戦国だった
ドイツ人や
イタリア人などを
連行し

鉄道や学校などの
建設、木を切るなど
強制的に労働を
させたのです



10日後

ようやく列車から
降ろされました



シベリア
ムーリー地区

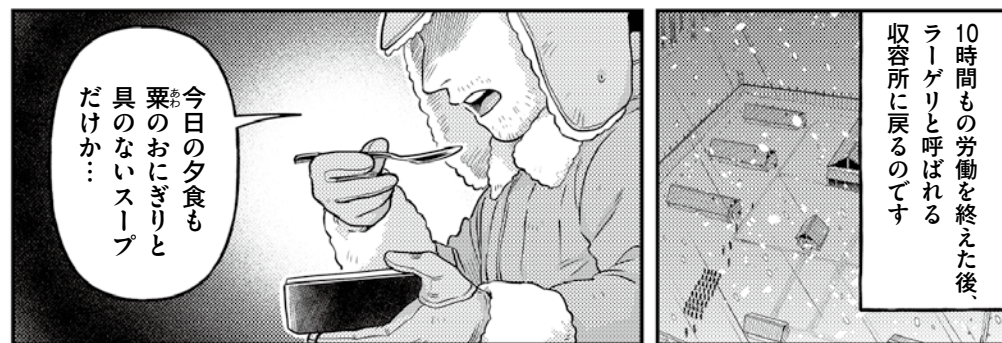
寒い日になると
マイナス30℃にもなる
極寒の地――



身を守るのに
十分とは
いえませんでした



ソ連兵が日本軍の倉庫から
持ち出した冬服や
ソ連側で用意した労働服が
配布されましたが





また今日も
誰かが倒れた
のか…



ドサ…

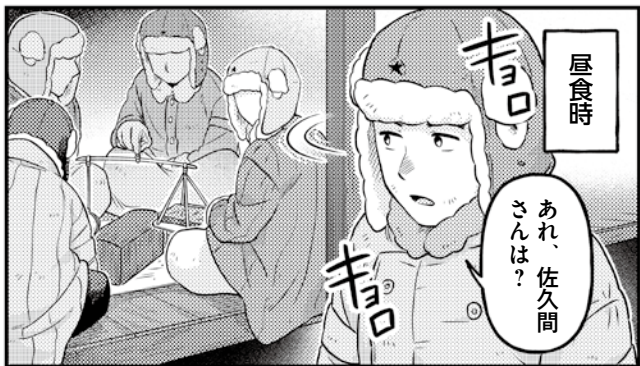


そして
来る日も来る日も
過酷な労働は
続いたのです



ああ、
あいつか…

やっぱり
アカンかったよ



昼食時

あれ、佐久間
さんは？



その紙は…

ん？
ああ、これは
セメント袋の
かけらだよ



ひいふみい…

9人だな
とりあえずコートを
回収しよう
死体に着せとくにや
もったいないからな



それじゃあ

そう、か…

あの
倒れていた
人が…



人の心配してる
場合だよ

死にかけのヤツは
ほっとおけよ

そうだ
おれたちだって
明日をも知れぬ
身なんだぞ



佐久間さん
咳が止まってない
じゃないですか
今夜は少しでも
あたたかい上段の
スペースで
休んでください

あ、ありが
とう…



当然だ

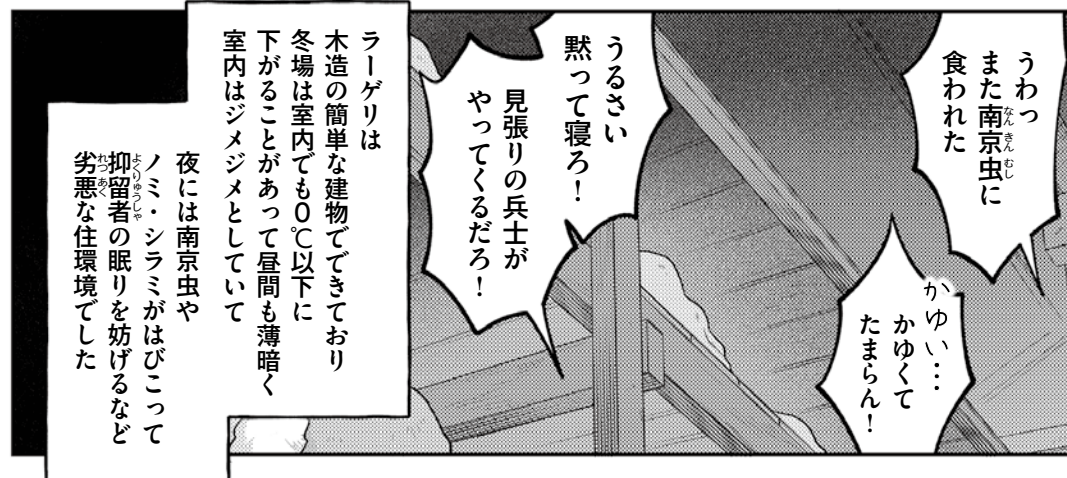
佐久間さん…



そんな
言い方…

いいんだ

こんな環境じゃ
誰だって心の余裕
なんてなくなる



うわっ
また南京虫に
食われた

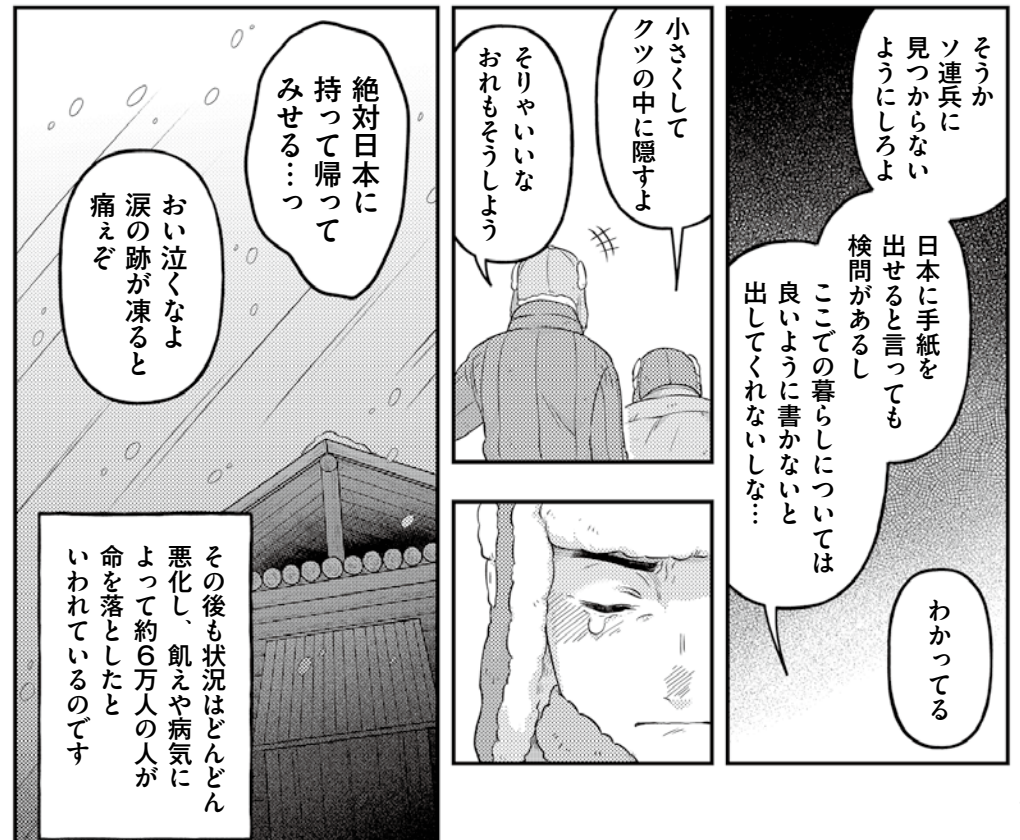
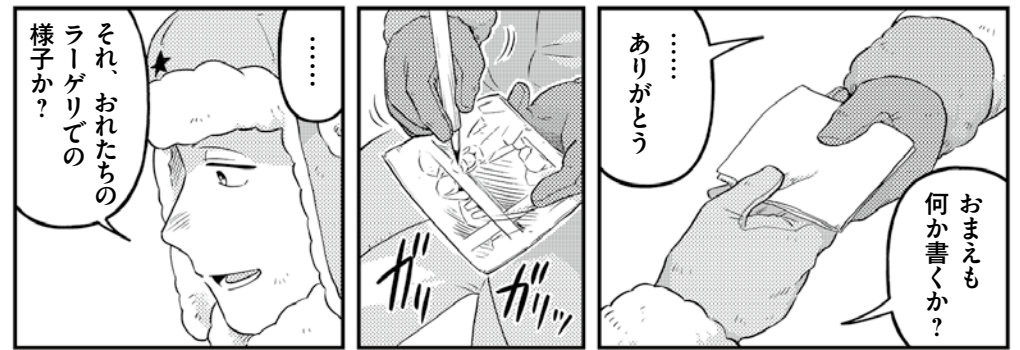
かゆい…
かゆくて
たまらん！

うるさい
黙って寝ろ！

見張りの兵士が
やってくるだろ！

ラーゲリは
木造の簡単な建物でできており
冬場は室内でも0℃以下に
下がることであって昼間も薄暗く
室内はジメジメとしていて

夜には南京虫や
ノミ・シラミがはびこって
抑留者の眠りを妨げるなど
劣悪な住環境でした

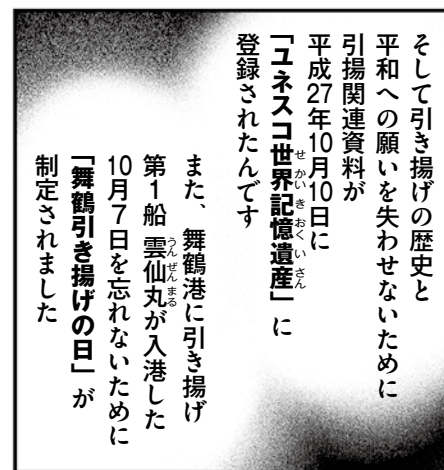
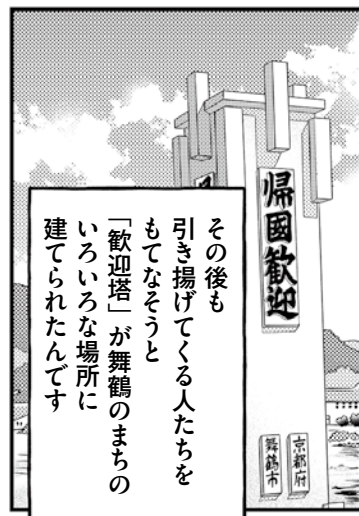




※慰問……不幸な境遇の人や、災害・病気で苦しんでいる人などを見舞うこと。



※故人……亡くなった人のこと





引き揚げと舞鶴

発行 2022年3月31日
舞鶴引揚記念館
〒625-0133 京都府舞鶴市字平1584番地 引揚記念公園内
TEL : 0773-68-0836 / FAX : 0773-68-0370

マンガ作画 濱田咲乃
編集 京都精華大学(京都国際マンガミュージアム)事業推進室

※本書の無断複製、転載は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

©舞鶴引揚記念館



ユネスコ世界記憶遺産

舞鶴引揚記念館

Maizuru Repatriation
Memorial Museum